

狂歌百鬼夜興

(157-60) 1冊

文政13(1830)年10月26日の深夜、京・東山の麓の某荒れ寺を会場にして肝試しを兼ねた歌会が催されました。寺の客殿を集合場所とし、離れに百筋の灯火と硯・紙・鉦を置き、参加者は一人ずつ客殿から真つ暗な渡殿と本堂を抜けて離れに向き「化け物」をお題に狂歌を一首認め、一筋ずつ灯りを消し、鉦を打って戻るといふ趣向。当日は日中から時雨が陰々と降り続き、荒れ放題の寺の様子と相まって舞台効果も抜群。ご丁寧に、離れの経机に誰かがしゃれこうべまで据え置いてくれました。さていよいよ会が始まりますが、どこからともなく細い笛の音が鳴り響いたり、暗闇で何やら黒くて長いものが這いずり回ったり、物陰からバリバリと何かをむさぼり食う音が聞こえたり…と次々に起こる怪奇現象に、参加者はもうパニック寸前!



本書は歌会の主催者・菊廼屋真恵美の編さんした、歌会の記録とそこで詠まれた狂歌の歌集です。前半

部分は、会が催されることになった経緯や、「妖し」の気配に怯えまくる参加者たちの様子などが、生き生きと臨場感に溢れた語り口で滑稽に述べられています。後半には「一ツ目」「皿屋敷」「人魂」などを詠んだ当夜の作品百首を、かわいらしい化け物たちの美しい彩色挿絵とともに掲載しています。最後に主催者兼編者・菊廼屋真恵美の狂歌を1つ紹介しましょう。

幽霊

幽霊もぞっとする程さむき夜は
火にあたりたき手つきにて出る

▶本書はたいま開催中の岩瀬文庫企画展「こんな本があった!」に出品中です。

西尾の古と探る

西幡豆の海運業・濱田屋藤十

濱田屋藤十は、明治22(1889)年頃から廻船を買い、廻船経営へと商売の転換を図り、34年には371石積み松寶丸を伊勢大湊で新造しています。松寶丸が明治38(1905)年12月6日から31日にかけて西幡豆から紀伊国古座川まで航海する様子は次のとおりでした。

6日午前6時に西幡豆海岸を出帆し、午後3時碧海郡新川沖に停泊。7日に新川港に入船して8日に松材を陸揚げ、10日午後瓦200枚、14日午後大根4万本を積み込み、15日に新川港を出帆して権現崎沖、師崎、伊良湖崎沖を通り、三河湾を出て志摩半島に向かいました。紀伊半島の海岸線に沿って進み、17日に串本で小船に大根7000本を渡し、19日に大島港の橋杭で大根2500本を荷揚げしました。20日には再び串本に帰って瓦を、また同日午後1時には東牟婁郡古座川に入船して大根5000本を荷揚げしました。21日午後4時には古座川を出帆し、同郡姫村海岸に22日まで停泊して伊串村で松材6000貫を積み込み、翌23日に松材4000貫を積み込んで帰路に着きました。往路のコースを戻り、25日午前3時に浜島港へ入船しましたが、海が荒れたため右舷を栄吉丸と結び28日まで停泊し、北風のため風を斜めに受けて進み、午後3時に矢港に入り、再び右舷を宝栄丸と結んで30日まで停泊。31日午前6時に矢港を出帆し、同日正午に西幡豆海岸へ帰りました。

航海を終えた松寶丸は正月を家で迎えました。3日には再び新川港に向け出帆しています。